



福祉系

対人援助職養成の

現場から^{④7}

西川 友理

実習目標と実習計画表

社会福祉士実習でも、保育士実習でも、学生たちは実習前に、自分なりの実習目標と実習計画を立てます。実習計画についてはこの連載にもたびたび書いています。実習目標を考え、実習計画表を作成する過程で、学生のその専門職に対する価値観がどんどん明確になっていくので、私はこのプロセスを大事にしたいと考えています。実習目標を立てるところから、実習は始まっ

ていると言ってもいいくらいです。

さて、がんばって考えた実習目標と、それを達成するための実習計画表を学生が持ってきました。

気合の入った実習計画、チェックするこちらにも熱が入ります。皆、自分のしたいことと、実習先で出来る事、国のカリキュラムとしてやるべきこと、この3つを織り交ぜて実習目標を立て、これを達成させるためにどうすればいいのか、一生懸命考えて、

自分なりの実習計画表を作成しています。
しかし、中にはうーん惜しい、もうちょっと何とかならないかなあ…という実習目標を学生もいます。

“利用者にとって最善の利益になるような支援をする” “利用者のニーズに沿った支援計画を立てる”

…うーん？

「ダメですか？」

「意気込みは素敵なんだけど、あなたは実習生だから“支援をする立場”じゃないからね…支援をするのも支援計画を立てるのも職員の仕事なんですよ、実習生の仕事やないの。」

えー、支援出来ないなら何しに行くの、とでも言いたげな不服そうな学生です。

“利用者とのかけがえのない関係性を構築する” “利用者との信頼関係を深める”

…何のために？

「え。何のためって、そりゃあ、信頼関係を構築するのは支援の基本だと思うから…。」

「利用者さんにとって、限られた期間しかない人と関係性を深める意味は何？すぐにお別れしちゃうのに？」

あー、確かに…そっか…と落ち込む学生です。

“現場の役に立つような働きをする” “保育者の仕事のお手伝いをする”

…いや待って待って！

「お世話になるのだから、実習先の役に立たないと、と思って…。」

「いや、実習先の役に立ちに行く必要ないから！そりゃ、実習先でお掃除やお洗濯を

することもあるだろうけど、実習先の役に立つためにそれをするんじゃないですよ。」

ええっと、じゃあ実習生は現場で何をやるんですか…と顔が？マークの学生です。

これらの学生に伝えることは1つ、共通しています。

「実習生は仕事に行っているわけでも、友達になりにいってるわけでも、アルバイトやボランティアにいってるわけでもなくて、勉強しに行ってるの！」

「それを考えると、実習目標は「～を学ぶ」「～の技術を習得する」といったものになるんじゃないの？ちょっとの間、その場にお邪魔して、学ばせていただく人としての態度ってのがあるんじゃないの？」

そう伝えたと、学生たちはそうかあ、なるほどねえ、という顔をして、再び実習目標を練り直します。

実習目標や実習計画書について、私は長年そうやって教えてきました。それで済んでいました。ほんの最近までは。

しかし、最近この自分の姿勢に疑問が生じてきました。

実習生という不思議な立場

基本的には考え方は変わっていません。実習生は教えを乞う人であり勉強しに行く人であり、技術の習得を目指す人です。でも、本当にそれだけでしょうか。

実習生は支援したり相談に乗ったりしてはいけないだろうか、と言われれば、専門職ではないので、良いことではないと思います。そもそもその専門的な方法を学んで

いる最中で、無責任にも支援をすることは
いけないことだとも言えます。実習はお金
を払ってピアノやお花やスイミングを習う
ように、実習費を支払って、現場に勉強さ
せていただきに伺うものです。

しかし、例えば一回の実習で、短ければ
保育士の実習で 10 日間、長ければ社会福
祉士の実習で 1 か月、利用者の方や職員
の方と、同じ空間で、同じ時間を共有する
のです。一緒に過ごす中で、関係性や相互
作用は自然にできてくるのではないでしょ
うか。また、そこが利用者にとっての生活
施設ならばなおさらです。実習生はもち
ろん、職員も、そして利用者も、お互い
が気を使いあい、譲歩して、なんとなく
思いやって、あるいは八つ当たりをして、
ぶつかって、甘えて、腹を立てあい、笑
いあい、気ますぐなり、お互いが自分
の「生活の場」であるように、その空間
を作ります。

そんな場で過ごす実習生を「教育のため
に、そこにいつとき存在するだけなのだ
から」とそこにいるという影響自体を無
視していいものなのでしょうか。

現場の邪魔にならないように 支援の妨
げにならないように、現場には現場の支
援計画や保育計画に基づいたかわりがある
のだから、そこに裨差するようなことは
避けて、礼儀正しく、慎ましく。一方
で、自分から何か出来ることはないか考
えて、明るく、積極的に、さっさと動い
て、色々と質問し、考えを深めて、覚
えて、知って、学ぶ。そして、実習契
約期間満了時には、そこにいた形跡を
残さず、サラッといなくなる。実習生
にはなかなか高度な社会性が求められ
ます。

誰が求めているのか？…養成校が、
現場が、求めます。そしてそれを受け、
学生自

身が自分自身に「そうあらねばならぬ」
と求めます。

…最近、長年そのような講義をして
きた自分が、とても不自然なことを実
習生に課している気がし始めています。

実習生に求められることは

昔関わった学生が、

「実習の時の俺のメンタリティってさ…
彼女の実家に初めて行って、彼女の家
族と居間で過ごしている時に、たまた
ま彼女がトイレとか行って、で、その
場にいなくなって、なんとなく彼女の
家族メンバーから品定めされているよ
うな、お手伝いの一つもしなきゃみた
いな、そんな気分になっている時の俺
…っていうのが、一番近い。」

と言っていたことがあり、確かに！と
クラスみんなで笑って盛り上がったこ
とがありました。

その時は笑い話にしていたましたが、
実はそのたとえ話はなかなか秀逸では
ないか、と思うのです。

人間関係をおそろおそろ始める時は、
実習生だけでなく、利用者や職員だっ
て同じように「この人はどんな人かな」
「どういう距離感で接したらいいかな」
と考えるのではないのでしょうか。つ
まり、「実習生が現場に」どうかかわ
るか、というよりも、「実習生と現場
が」どうかかわっていくか、という
相互作用が発生するものです。

彼女の家のお父さんやお母さんにど
う見られているか、どうか関わろうか、
と考えている時に、彼女のお父さんや
お母さんも、どう話しかけようか、ど
う接しようかと考えているのと同じよ
うに、です。

「伴走型支援」が注目される中で…

近年、厚生労働省は、対人支援において今後求められるアプローチとして具体的な課題解決を目的とするアプローチである「問題解決型支援」と、繋がり続けることを目的とする「伴走型支援」が大切だという見解を示しています。前者は「本人が有する特定の課題を解決することを目的とする支援」です。後者は「暮らし全体と人生の時間軸をとらえ、本人と支援者が継続的につながり関わるための支援」です。

長年、対人援助の支援というのは、「問題解決型支援」が中心でしたが、ここ10年ほどの間に「伴走型支援」の重要性が非常に注目されてきました。

この動きを背景に、支援者は「利用者に対して何をするか」だけでなく「利用者とともにどう居るか」ということを今までよりも意識せざるを得ません。それが、今までの私の中にあった「実習生像」をじわじわ侵食してきています。

実習指導の方向性

以前は実習直前の学生たちに息巻いて、「実習生は勉強させて頂きに行く人なんですよ！」

「支援をしにいくんやないよ！おこがましきも支援しにいこうと思ったらあかんよ！」

「でも行動としては積極的にいくんですよ！ちゃんと自分からガンガン質問しに行くし、現場のお手伝いも率先してやるねん

で！」

そう言っていたのが、最近何だか恥ずかしくなってきました。

今は、大体こんな感じです。

「実習生は勉強させて頂きに行く人です」
「支援をしに行くわけではない、現場を荒らしに行く人でもない、んだけど…気づかぬうちに、支援になっている可能性もあるかもしれない。逆に何かの妨げになる可能性もあるかもしれない。その支援の場の性質によって、あなたがどう作用するか、今の私にはわかりません。」

「でも、少なくとも、倫理綱領や法律を勉強しましたよね。何がやったらあかんことか、何が大事なことなのか、もう知ってるよね。」

（と聞くと、頷く学生たち。）

「それに、現場の妨げになりたいと思ったくないでしょ。支援の邪魔をしたいと思わないでしょ。出来れば、利用者さんとも、職員さんとも、そしてあなた自身も、機嫌よく過ごしたいと思っているでしょ。」

（と聞くと、さらに大きく頷く学生たち。）

「それでも、変なことしていたら、あなたの常識と現場の常識が違っていたら、“ヘンやな、おかしいな”と思われるような行動をしていたら、多分、職員さんや利用者さんが指摘して、教えてくださるんじゃないかしら。」

すると学生が言います。

「ヘンやで、とか、おかしいで、と指摘されたら嫌ですやん。指摘されへんようにならうしたらいいか教えてくださいよ。」

ううむ、と頭をひねる私です。

「うーん、でも、何がヘンでおかしいこと

になるのか、厳密には私もわからへんもの。それで指摘されるのが、一番の勉強になるんやないかなあ。学生の中に、実習で、いっぱい失敗しに行くんやで。それだって、失敗したいと思ってやることなんてないでしょう。ヘンなこと、おかしいことをしたいと思ってやっているわけじゃないでしょう。倫理綱領や法律をしっかり勉強した上で、正しいこと、よいこと、あるいは、こうするしかしゃあない、と思ってやるでしょう。だったらめったに酷いことにはならないでしょう。」

「専門職として、実習生として、というより、そこに一定期間、勉強のために入らせていただく人として、どのようにそこにいるのか。たぶんそれもまた、専門職という社会人になる勉強じゃないかなあ。」

「大丈夫、実習は養成校と現場の契約でやってるねんしな。責任は、養成校が取るから。思い切り勉強してきて、ヘンなのかお

かしいのか正しいのかいいことなのか、自分で考えてきてくださいよ。そんでいっしょに考えよう。」

実習指導のあり方の変化

誰かと共にあるとはどういうことか。それを、実習でどのように感じ、考え、学生なりに得てくるのか。そんなこと、10年前には実習指導の最中に考えもしていませんでした。最近の自分の実習指導のスタイルがかわりつつあります。

それにしても、年を経るにつれて、学生に対して断定的に「こうしてきなさい」ということがどんどん言えなくなって、「わかんないや、一緒に考えよう」と言う割合がどんどん増えていきます。

その方が、学生も私も地に足がついた学びが出来る気がしてきています。